令和元年度

小金井平和の日記念行事

「平和作文集」
「平和行事参加の旅感想文」

小金井市

は　じ　め　に

現在、本市では、先の大戦において犠牲となられた方々を悼み、恒久平和を祈念して小金井市戦争犠牲者追悼式を３年ごとに行っています。昭和２８年には、戦争による犠牲者の霊を慰めるとともに戦争の惨禍を忘れず、再びかかる不幸を繰り返すことのないよう、私たちの平和を祈念する記念碑として小金井町戦争犠牲者慰霊碑を建設し、同年１２月２０日には、その除幕式及び慰霊祭を行いました。また、平和に関する宣言として、昭和３５年１０月３日には、地方自治体が平和の尊さを訴え、世界連邦運動に賛同を表する「世界連邦平和都市宣言」を行い、昭和５７年４月１日には、世界の唯一の核被爆国として、また、平和憲法の精神からも、核兵器の全面廃絶と軍備縮小の推進に積極的な役割を果たすべきとして「小金井市非核平和都市宣言」を小金井市議会において行っています。そして、昭和５４年３月２０日に制定された「小金井市市民憲章」の中でも、平和を願う市民の強い思いを示しているところです。

本市ではこれまで、平和都市として未来の子どもたちに平和な世界を継承していくために、戦争の悲惨さと、平和の大切さを発信し続けていくことが必要であると考え、「非核平和映画会」、「平和行事参加の旅」、「原爆パネル展」、「平和講演会」など、様々な平和事業を継続して展開してきました。また、「日本非核宣言自治体協議会」及び「平和首長会議」にそれぞれ加入するなど、平和を希求する自治体としての姿勢も示しているところです。

そして、平成２６年１２月１８日に戦後７０年の節目を迎えるに当たり戦争の記憶を風化させないため、改めて平和の大切さや命の尊さを語り合い、考える機会をつくるため、「小金井平和の日条例」を制定しました。

この文集は、同条例に基づいて実施した平和の日記念行事における作文コンクールの受賞作品等６編及び平和行事参加の旅参加者による感想文６編を文集にしたものです。ご覧いただき、未来の子どもたちに平和を引き継いでいくため、共に「平和」について考える機会にしていただければ幸いです。

令和２年３月

企画財政部広報秘書課

目　次

【入賞作文】

小学生の部　大賞
「平和な社会を目指して」
横須賀　可憐（小金井市立小金井第一小学校　５年生）・・・・１

小学生の部　優秀賞
「せんそうとどうぶつたち」
浅野　智太郎（東京学芸大学附属小金井小学校　１年生）・・・４

中学生の部　大賞
「平和な世の中にするために」
濱田　達也（小金井市立東中学校　１年生）・・・・・・・・・・６

中学生の部　優秀賞
「平和について考える意味」
菊地　港（小金井市立東中学校　３年生）・・・・・・・・・・・８

【佳　作】

小学生の部
「戦争と平和」
滝澤　あかり（小金井市立南小学校　６年生）・・・・・・・・・１０

中学生の部
「平和のためにできること」
飯田　結子（小金井市立東中学校　３年生）・・・・・・・・・・１２

【平和行事参加の旅参加者による感想文】

「平和行事記念式典（広島市）に参加して」
足立　信子（６０歳代　女性）・・・・・・・・・・・・・・・・・１４

「平和への感謝、責任、そして、覚悟」
杉浦　さとみ（５０歳代　女性）・・・・・・・・・・・・・・・・１５

「平和行事に参加して」
鈴木　正一（７０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

「被爆地広島に訪れて」
谷口　渚恩（１０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

「広島に行って」
中川　良幸（４０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・１９

「平和行事参加の旅」
池上　裕（１０歳代　男性）・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０

大　賞

「平和な社会を目指して」

横須賀　可憐（小金井第一小学校　５年生）

九十七歳の私のひいおじいちゃんは戦争体験者です。お正月に会った時に、私に戦争について話してくれました。
「陸軍から赤紙が届いた時はついに…。と思ったよ。船で中国の北支に渡り内陸を四年間歩いて移動して終戦まで中国にいたんだ。北海道から沖縄まで歩くくらいのきょりを、夜間敵に見つからないようかくれながら歩き、食べ物も無くいつ戦争が終わるかも分からず辛くて苦しい体験だったよ。実際に帰って来た時には、三分の一の人数になってしまった。ほとんどの人は死んでしまって、おじいちゃんが帰って来られたのは運が良かったんだ。やっとの思いで日本へ帰って来ても、働く場所も住む場所も無い。食べ物も無い。途方にくれて向かった復員局で、友人に会えたおかげで職と住む所を得る事ができた。あの時あの人に会えなかったらおじいちゃんはどうなっていたかな。」
そんな風にひいおじいちゃんは話してくれました。
「戦争の体験者は高齢化していて、戦争を知っている人は少なくなってしまった。だから戦争について話してほしいと言われた事もある。でも、おじいちゃんにとって戦争は辛くて苦しくて悲しい事ばかりだった。今でも思い出したくないことで、聞かれたから話したけど本当は話したくないんだ。思い出しちゃうから。」
そう言ってひいおじいちゃんは、困ったような悲しそうな何とも言えない顔をしました。そんなひいおじいちゃんを見て、私も困ったような悲しいような何とも言えない気持ちになりました。聞いちゃいけなかったのかなと思いました。ひいおじいちゃんは、おだやかでいつもニコニコしています。ニコニコしながら、「可憐ちゃんの時代は平和で良かったな。戦争なんか無いほうがいいよ。」
と私に言ってくれました。戦争を知っているひいおじいちゃんの言葉だから、なんだか心にしみました。

ひいおばあちゃんからも戦争の話を聞きました。ひいおばあちゃんは、今の私と同じ年の小学五年生の時に、東京大空襲で家族を全員亡くしました。三月十五日の事です。一日早く栃木県佐野市に疎開していたひいおばあちゃんだけが生き残ったのです。
「『明日必ず弟を連れて来るから待っていて。』と言ってお父さんは帰っていった。それが最後の会話になってしまった。戦争孤児になったおばあちゃんは、そのまま佐野の親せきの家で育ててもらったんだよ。もしもあの日、お父さんが泊っていたら、空襲にまきこまれなかったのに。もしもあと一日早く家族で疎開していたら全員助かったのに。」
一人ぼっちになってしまったおばあちゃんは、自分だけ助かったのが悲しくて辛くて仕方なかったそうです。
「それでも、もしかしたら助かってどこかで生きているかもしれない。明日、必ず来るからと約束したんだから。弟は、まだ小さくてきっと自分の名字も分かんなかったんだしねえ。」
七十年以上経っても、ひいおばあちゃんはあの日の事を忘れたことは無いそうです。
二人の話を聞いて、戦争は思い出したくないけど忘れられない、辛くて悲しい事なんだと思いました。
家族がいっしょに笑って暮らせること。一日三回おなかいっぱいご飯が食べられること。好きなおやつが出ること。学校に行って友達と会えること。たん生日にプレゼントをもらえること。おしゃれな洋服を選べること。年に何回か、ごうかな料理が食べられること。たまに旅行に行けること。どれも私にとって当たり前の事で、この当たり前の事が平和と言う事だなんて考えた事もありませんでした。
「戦争はイヤだなあ。戦争なんてしない方がいいなあ。」
ひいおじいちゃんは、そう言っていました。
「世の中の皆がそう想っていたら、戦争なんか起きないはずだよ。」
平成の時代は、初めて戦争の無かった時代だそうです。平和が当たり前と言われる幸せな時代です。この時代に生まれてこられて良かった。世の中の皆が平和で良かった。戦争の無い令和の時代が続けばいいな。私達が大人になった時も、平和が当たり前だと言える様に。家族が笑ってくらせる様に。皆が幸せ

でいられる様に。心の底からそう思いました。これからは、私たちが戦争の無い平和な社会を作っていきたいです。皆の幸せな未来のために。

優秀賞

「せんそうとどうぶつたち」

浅野　智太郎
（東京学芸大学附属小金井小学校　１年生）

ぼくは、上野どうぶつ園が大すきです。スマトラトラやホッキョクグマ、キリンやサイといった、いろいろなどうぶつたちを見ることが大すきです。とくに、ぼくが一ばん大すきなどうぶつは、ゾウです。ゾウは体がとても大きくて、はながすごく長くて、耳がぼくのかおより大きいです。でも、とてもやさしい目をしているとおもいます。

十二月二十二日、ぼくはかぞくで上野どうぶつ園に行きました。もちろん、大すきなゾウも見ました。ゾウがいたうんどうじょうのはんたいがわに、おはかがあることにきがつきました。くろくて四かくいハコの上に、リボンとフクロウがのっていました。ハコのうしろには、たくさんのおはかがたっていました。ちかくにはかんばんがあって、リボンは、どうぶつへのあいじょうをいみしていて、フクロウは、どうぶつを見まもるいみだそうです。

ぼくは、前にあさがやとしょかんでよんだ「かわいそうなぞう」という本をおもいだしました。この本は、上野どうぶつ園でかわれていたジョン、トンキー、ワンリーという三とうのアジアゾウのおはなしです。せんそうでばくだんがおとされて、おりがこわれて、どうぶつがにげて人間をおそわないように、日本中のたくさんのどうぶつがころされました。上野どうぶつ園では、ぜんぶで二十七とうのどうぶつがころされました。まずはクマがころされました。つぎにライオンやトラ、チーター、ヘビがころされました。さいごにゾウがころされました。ゾウは、さいしょはどくの入ったジャガイモをたべさせられそうになりました。でも、あたまがよいのでたべません。つぎに、どくの入ったちゅうしゃをうたれそうになりました。でも、ひふがあつくてうてません。そこで、エサも水もあげずに、うえじにさせたそうです。

ぼくは、この本をよんだとき、せんそうはこわい、いやだ、とおもいました。三とうのゾウは、とおいくにからぼくたちをたのしませるためにやってきました。うえじにするために、日本にきたわけではなかったとおもいます。しぬまで、エサもたべられないで、水ものめないで、くるしかったとおもいます。ぼくは、ごはんのじかんが一じかんおそいとおなかがすいて、くるしくなります。体の小さいぼくがこうなのに、体の大きいゾウたちは、どんなおもいをしたのだろう。どんなにつらかったのだろう。せんそうをしたのは人間なのに、なんでどうぶつがころされたのだろう。あんなにやさしい目をしたゾウは、人間をおそわないとおもうのに、どうしてころしたんだろう。

ぼくは、せんそうは、こわい、おかしい、とおもいます。せんそうをしても、どうぶつも、人間もしあわせになれないとおもいました。ぼくは、せんそうのない日本でくらしたいです。上野どうぶつ園のどうぶつたちに、いたくて、くるしいおもいをしないでほしいです。どうぶつたちに長生きをしてもらいたいです。そして、これからもずっと、上野どうぶつ園でたくさんのどうぶつを見たいとおもいます。みなさんも、そうおもいませんか。

大　賞

「平和な世の中にするために」

濱田　達也（東中学校　１年生）

「平和」という言葉から私が最初にイメージしたのは「ノーベル平和賞」でした。以前にアルフレッド・ノーベルの伝記を読んだことがあったからかもしれません。ノーベルはダイナマイトの発明で巨万の富を得た一方で戦争で使用され、多くの人々が死んだことを嘆き、遺言でノーベル賞を創立しました。物理学、化学、生物学・医学、文学と共に「平和」の部門もあります。私は平和賞こそ、自分の発明で多くの命を失うことになったノーベルのノーベル賞設立の動機だったのではないかと思います。しかし、私は去年のノーベル賞で日本人の吉野彰さんがノーベル化学賞を受賞したことはメディアで大きく取り上げられたため知っていましたが、平和賞の受賞者が誰なのかまったく知りませんでした。

調べたところ去年のノーベル平和賞に選ばれたのは、アフリカ東部・エチオピアのアビー・アハメド首相でした。アビー首相は２０１８年、首相に就任してからわずか三ヶ月で、長年対立関係にあった隣国エリトリアとの和平を実現したことなどが、高く評価されました。エチオピアでは１９９３年に同国から独立したエリトリアと国境線などをめぐる争いが続き、９８年に武力衝突に発展し、約十万人が犠牲になってしまいました。第二次世界大戦以降に勃発した国家間紛争のうち、死者数が十万人を超えるとされるとされるのは、朝鮮戦争、インドシナ戦争、ベトナム戦争、イラン・イラク戦争と本戦争のみです。

受賞後の演説で、アビー首相は、およそ二十年前、みずから兵士としてエリトリアとの戦争の最前線に立った経験を踏まえ、「私は自分自身の目で戦場の醜さを見た。エチオピアとエリトリアの国民は敵どうしではなく、貧困という共通の敵の犠牲者だった。」と述べ、エリトリアのイサイアス大統領と経済的な発展を目指し和平の合意をしたと明かしました。そのうえで「平和の構築は人々が力を合わせ、これまでの心情や信念、そして姿勢を変えていく道のりだ。それはまるで私の愛するエチオピアの農民たちの日々の営みのようだ。私

も季節がどのように変わろうとも平和への歩みを進めていく。」と述べ、たとえ困難があっても他の国々の指導者や市民と協力しアフリカの平和と安定に力を尽くしていく決意を強調しました。

私は、日本人が、ノーベル賞を受賞することは、とてもうれしく誇りに思います。ただ、アビー首相の偉大な功績やエチオピアが抱える問題について、日本のメディアがあまり取り上げなかったことは残念に思います。今苦しんでいる人々に平和を与えた人を取り上げ、平和への関心を全世界で高め合っていくことがとても大切なのではないかと思います。

自分の国だけではなく、戦争を無くし世界中を平和にすることを一人ではなく、みんなで行うような世の中にしたいと思いました。

優秀賞

「平和について考える意味」

菊地　港（東中学校　３年生）

平和とは何でしょう。それを考える上で根底にあるのが戦争です。つまりは争いです。この世の中から争いが消えれば、人々は安全に生きられます。戦争は災害なのです。自然災害と違い人類が始め、人類同士が殺し合う本来あってはならないものです。なら、どうやって戦争、争いをなくすことができるのか。それは簡単です。戦争をしなければいいのです。戦争は勝手に起こるものではありません。先程書いたように人類が始めるのです。戦争をしなければいいと口で言うのは簡単ですが戦争、争いを止めることができるならもうとっくにこの世の中は平和で、平和について考える必要もありません。簡単で単純なことが実は一番難しいというのも僕は納得できます。

私たち学生にとって一番身近な争いは、いじめだと思います。強い人達が弱い人に対して、暴力を振るい、嫌がらせをする。考えてみてください。この行為がもし国家間の規模で起こったとしたら、それはもう戦争です。以前テレビで実際にいじめを受けた経験のある人がいじめとは何か語っていました。その時、彼はこう言いました。

「いじめとは空気だ。」と。

誰かがいじめをし始め、誰も逆らえず結果的には、クラスで少人数の人たちを差別する。みんなが差別しているから、僕も私もそうしようと、どんどん増えてゆく。つまりは民意だと僕は思います。この点においても、戦争や争いと重なる部分があります。意見や考えが違うから、信仰している宗教が違うから、そういった理由で相手を嫌い、同じ考えを持つ人を集め組織を作り、攻撃する。これもある意味その人たちにとっては民意です。

アメリカのある調査では、広島に原爆を投下したことに対して、賛成という人は、全体の五十パーセントもいるという結果が出ています。これもまた、民意なのです。

民意とはとてもいいものです。民主主義を掲げている日本では、より多くの国民の意見「民意」は重要になります。しかしその民意が悪い方向に傾き、レールを外れると誰にも止められません。少数派の人たちにとって巨大にふくれあがった民意は、恐ろしく、脅威でしかないのです。

民意という名の濁流から抜け出して平和というものを実現するために僕たちができることは何か、それは、平和について考えることだと思います。人はそれぞれ違った価値観を持っています。しかし、戦争をしてはいけない。ということは確実に言えることです。そのことを念頭に置いて、考え、教えていくことで心を動かされ国を引っぱっていく存在がいずれ、現れます。それは十年後の自分かもしれない。隣に座っているあの人かもしれない。もしかしたら自分の子供かもしれない。それも百年後、二百年後かもしれない。もしかしたら明日かもしれない。ですが必ず現れます。そのためにも、私たちは後世に渡って戦争があった事実と、二度と繰り返してはいけないということは伝えていかなければなりません。

百年後、二百年後の世界をつくるのは、まだ生まれていない自分たちの子孫なのです。戦争が起き、日本に原爆が投下されたという過去は変わりません。ですが、未来を変える権利は誰にでも平等にあるということを僕は忘れずに生きていきたいです。

いつか戦争、争いの恐怖から世界中の人々が解放される日が来ることを、心から願っています。

佳　作

「戦争と平和」

滝澤　あかり（南小学校　６年生）

今も世界のどこかで起きている「戦争」。戦争はなぜ起きるのでしょうか。宗教の違いからなのか。その国の資源や領土がほしいからなのか。自国の偉大さを示すためなのか。戦争が起きる原因はさまざまだと思いますが、その戦争によって亡くなる人々、傷つく人々は今こうしている間にもどんどん増えていることでしょう。

私は夏休みに「火垂るの墓」という本を読みました。その本の主人公、清太と節子の兄妹は戦争により両親と死に別れ、二人で必死に生き、そして亡くなっていきました。二人が飢えていく様子は読んでいて辛くなる位にむごく、悲そうなものでした。そして先日、祖父の勧めで「この世界の片隅に」という映画を観ました。この映画の主人公、すずもまた戦時中の日本で貧しさや身内の死を経験し、残された家族で力を合わせて強く生き抜いていました。私は二つの作品から、争いは食べ物による体の飢えだけでなく人々の心も飢えさせるのだと感じました。今、私が暮らす日本で、小金井で、清太やすずたちのような生活をすることは考えられません。私たちは当たり前のように毎日おいしいご飯を食べ、学校で勉強したり友達と遊んだりして、温かい布団で眠ります。それが日常で、例えば今夜、空襲によって家がなくなるかも、だなんて想像もしません。私が清太たちだったら、あんな風に強く生きていけるだろうか。二つの作品に触れ、当たり前のようで当たり前ではない毎日について深く考えさせられました。戦争によって奪われる日常。世界中には今日も大人たちが起こす争いのために恐怖を感じ、命の危険と向き合いながら暮らす子どもたちが沢山いるでしょう。この世界から戦争をなくすために、清太たちのような思いをする人をなくすためにどうしたらよいのだろう。政治とか経済とか難しいことはわからないけれど、私なりに考えてみました。まずは、戦争のことを知ること。戦争を経験した人の話を聞いたり、本を読んだりして、戦争によって失うものの大きさを知ること。私の祖父は終戦の翌年に生まれました。だから、戦

時中のことを知りません。このように戦争を知る人の数や戦争を知る人から話を聞く機会は、どんどん減っていきます。だからこそ、今のうちに沢山聞いて受け継いでいくことが大切だと思います。そして、一人一人が自分の周りにいる大切な人に清太たちのような思いをさせないという強い心をもつことが大事だと思います。世界中の人が、自分の家族や友人を大切にして平和に暮らしていけるように願い、行動していくことで、それはつまり世界中の人が幸せで平和に暮らしていけることに繋がると思うのです。

日本には、戦争をしないという憲法があります。これは、人権を守るための憲法で、人権とは人が生きる権利だと思います。この生きる権利を守る憲法が、世界中に広がるといいなあと思います。文化や宗教によって考え方の違いがあっても、争いではなく平和的な解決ができるように変わっていってほしいです。そのためにも世界中の子どもたちが戦場での戦い方ではなく、平和な生き方について学べる世の中になってほしいなあと思います。私もこれからもっと戦争と平和について学び、出来ることから行動していきたいと思います。

佳　作

「平和のためにできること」

飯田　結子（東中学校　３年生）

日本は戦後、海外に軍隊を派遣することはあっても、戦場で人を殺すことはなく、一人の戦死者も出したことはないそうです。

戦争の体験がなく、話でしか聞いたことのない私は、日本が戦争をしていた事実をどこか現実とは思えない自分がいます。

テレビや新聞、学校の歴史の授業などで、戦争の悲惨さや、苦しみを目と耳で感じたりしたことはあっても、何不自由なく普通に日常を送れる今、戦争について深く考えることをしてきませんでした。

どうして戦争は起こってしまうのでしょうか。今も中東では、戦争や内紛が起きていて、何の罪もない子供やお年寄りが犠牲になり、命を落としているそうです。

又、北朝鮮は日本へ向けてミサイルを発射し、アジアだけでなく、世界が震撼しています。どんなに核廃絶を訴えても、それが浸透しきっていないのが現状です。ひとつまちがえれば、私達の未来は大きく変わってしまう可能性があるのです。そう考えると、私は底知れない恐怖を感じます。

「平和」はどこか遠くにあるのではなく、身近にあるのではないでしょうか。私は、今いるこの場所で心を開いて、人間と人間の心の絆を結ぶことが、平和を創ることにもつながると思います。世界中の多くの人が、一人一人平和を願い、訴えていくことが何よりも大切なのではないでしょうか。

自分自身の中にある、人に対する偏見や、差別をなくすことも大事だと私は思います。

戦争を起こすのはそういった人間の誤った認識なのですから、戦争を知らない私たちにできることは何か？悲しみや後悔しか生まない戦争を二度と起こさないために、戦争の苦しみを体験した人の話を語り継ぐこと。記録を残すこと。決して風化させてはいけないこと。加えて、私は少しでも平和に貢献するために、専門的な知識や技能を身につけることもとても大事なことだと思いま

した。

特に語学力は、世界中の人とコミュニケーションをとるために、必要不可欠です。一人一人の人間が、多種多様な人と対話をし、互いの思想を分かち合うことで、自らの偏見、差別意識をなくしていくことが、平和を築くことにつながると信じます。

そして、何よりもわすれてはならないことは、今の日常です。

一日に三回食事ができること。電気、ガス、水道が使えること。学校に行き、学習ができること。友達と仲良く話せること。テレビや映画を見て笑えること。インターネットの普及によって、日本だけでなく、世界中の情報を得られること。自分の夢や希望を持ち、拡げられる可能性があること。

生まれたときから今まで、それができることが当たり前なことだと思って生きてきましたが、これからは、その一つ一つに感謝をし、この日常が世界中で送れる毎日になることを願っています。

「平和行事記念式典（広島市）に参加して」

足立　信子（６０歳代　女性）

広島へ行くことならいつでもできますが、「原爆の広島」へは今回しかないという気持ちで参加させていただきました。

初日は原爆ドーム・慰霊碑へ行きました。写真では繰り返し見た原爆ドームをはじめて間近で見た時は本当に感無量でした。これは原爆禁止を世界に訴える記念碑として永久に残していかなければならないと思いました。続いて新しくなった平和記念資料館（原爆資料館）を見学しましたが、改めて戦争の惨禍に身の引き締まる思いでした。

翌日の原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式では、思いがけず一人一人が献花するということで、私の順番がきたときにはとてもドキドキしました。

現地で一生懸命に説明し、いろいろお世話にしてくださった広島のボランティアガイドの方たちの姿には心うたれるものがありました。

これを機会に平和とは何かということを考えていこうと思いました。

「平和への感謝、責任、そして、覚悟」

杉浦　さとみ（５０歳代　女性）

例年より随分遅れて梅雨が明け、まさに暑さのピークとなった頃に、「平和行事参加の旅」に参加しました。
修学旅行で長崎を訪れたことはありましたが、広島は、今回の旅で初めて訪れました。

広島駅に到着し、ホテルにチェックインを済ませると、今年の春にリニューアルオープンしたばかりの平和記念資料館へ向かいます。
初めて訪れた広島市街の印象は、「豊かな水路と緑に囲まれて、その中に人々の暮らしがあり、とても美しいところ」というものでした。
特に、１日目の８月５日は、晴れ渡った空の下、木々の緑、そして川の流れが、ひときわ豊かな生命力を反映しているように見えました。

平和記念資料館で、原爆の被害にあった方々の写真や、身につけていた衣類、カバン、その他、大切にしていた遺品の数々の展示を見て行くうちに、74年前の原爆投下時にも、同じように暑い夏の盛りで、真っ青に晴れ渡った空の下、今こうして広島を訪れている私たちと同じ様に、未来に対して様々な思いを抱いている人たちの生命が、一瞬にして奪われたのだという事実が、確かな重みを持って、胸の内に広がって行きました。
「戦争はいけない、平和を守らなくては」と、これまでも常に思ってきたものの、終戦後に生まれ、原爆がどういうものかを直接には目にする機会なく育ってきた私にとっては、やはり「戦争」というのは、過去の出来事でした。
自分となんら変わらない、市民の方々の未来を、一瞬にして奪ってしまった原爆。
時が経っても、その影響は、様々なところに影を落として存在し続けていることを知りました。

ホテルでの夕食の際に、私は、現在の広島の美しい街並みと、その場所に原爆が落とされたのだという事実のギャップを思うと、街の美しさが余計に胸に刺さる気がすると感想を述べました。
ゆったりと流れる元安川のほとりに佇む原爆ドームの姿、そして、海外から来られた方々も大勢集まり、原爆ドームをカメラに収めているところを一見すると、まるで、ヨーロッパの観光地にでも来たのかと錯覚してしまいそうな気がしたのです。
でも、その美しい風景、そして、今のこの平和な時間は、戦争で犠牲になった無数の方々の魂が、そして、一瞬にして全てが失われ、死の街と化した広島を、一から立て直してきた市民の方々が、これまで守ってきてくれたものです。
この美しい風景を美しいまま、平和な時間を平和なまま、未来へ継承していくことができる様、自分が伝えられることは、未来へ伝えて行こうと思いました。

翌日６日の平和祈念式典の朝、近づきつつある台風の影響で、式典の日としては珍しく、雨が降りました。
式典開始後、徐々に強まる雨足でしたが、その中で放たれた鳩の群れが、力強く、大空へ羽ばたいて行きました。
慰霊の碑に手を合わせ、初めてこの地に立たせていただいた感謝を捧げ、未来を担っている者の一人として、どんなことがあっても平和を守って行く責任、覚悟を新たにしました。
いつかは訪れるべきところとして、広島は常に意識の中にあったものの、自分一人では、なかなか行動に移すに至りませんでした。
小金井市の平和行事参加の旅に参加させていただき、多くの学びや気づきに富んだ、大変貴重な時間を過ごさせて頂きました。
来年以降も、ますます多くの方が参加され、平和に対する思いを深めていただけることを願ってやみません。
本当にありがとうございました。

「平和行事に参加して」

鈴木　正一（７０歳代　男性）

昭和２１年、私の生まれた年です。したがって私は戦後生れということになり、福島県の片田舎で高校卒業時まで過ごしました。当時は、戦争に関する情報が乏しく、原子爆弾の惨劇を知ったのは写真によってであり、きのこ雲と言われるものや原爆ドームを目にはしたものの、広島や長崎を知らない私にとっては他国で起こったように感じていました。成人後生活様式の変化からテレビを観る機会が多くなり、２０代半ばでテレビを持てるようになって広島を知り長崎を知り第二次世界大戦の惨劇を知りました。

１０数年前に孫と一緒に広島平和記念資料館を見学しました。あの時の衝撃は大きかったのですが、孫の目に触れさせたくないようにした展示品があったり、私自身も目にしたくない展示品などもあり、深く思いを止めることは出来ませんでした。今回再びリニューアルされた資料館を訪れる機会をいただき、改めて展示品の数々を見て、地球上の何処にあってもこのような惨劇を起こしてはならないと深く思いましたし、平和についても考えてみることが出来ました。

私は小さい頃から兵隊は嫌いでした。それは、私の父は徴兵されて戦地に赴き、主に炊事を担当していたそうです。酒を飲めなかった父は出征により炊事をする傍ら酒を覚え、帰還後、疲れや生活上の不満を紛らわすために酒の力を借りるようになり、これが母や子供たちにとてつもなく嫌な思いとして残り、酒＝兵隊＝嫌いとなったわけです。

戦争の惨劇は部分的には自然災害でも見られることですが、災害は気象変動によって起こることから人知ではいかんともしがたいが、戦争は人間が引き起こすものです。その人間はまた他人の幸福をも考えられます。他人の幸福を考えられる人間はこうしたら人間は悲惨になる、不幸になる、だから止めようとする事も出来ます。つまり、他人の犠牲の上に自分の幸福は築かない。このような考えを持って行動していく必要があるのではないでしょうか。

「被爆地広島に訪れて」

谷口　渚恩（１０歳代　男性）

広島市長は式典で「あのようなことを後世の人たちに体験させてはならない。私たちのこの苦痛は、もう私たちだけでよい。」という言葉を紹介していました。この言葉は、当時十八歳だった男性の言葉です。被爆体験者が高齢化し、当時のことを知っている人が減っていく中、被爆体験の語りべをしている全ての人がこの事を思って活動しているそうです。

僕はこれまで、原爆を投下された当時のことを、テレビや教科書でしか学んできませんでした。資料館には、学んできた物がそのまま展示してあると思っていました。しかし、展示してあるものは全て生々しく、見ただけで当時の状況がどれだけ恐ろしかったかがわかるものでした。写真は、いままで見た中で一番惨たらしいものが周りの雰囲気とあわさり、より恐怖を感じました。当時使われていた物の展示は、もともと何だったかすらわからない物も多く、今では考えられないような状態でした。この二つだけでも原爆のおそろしさがよくわかりましたが、原爆のおそろしいところは、その威力だけではありません。被爆者の話では、生き延びた人の多くは被爆してしまい、そのまま命をおとしてしまう人や、症状がでていないが、被爆したというだけで差別された人も多かったそうです。

僕達の世代は、他の世代とくらべて、戦争や原爆への意識がうすくなっています。流行のゲームは、まるで戦争を再現したようなものが多いです。僕はこの見学で学んできた事を胸に、被爆体験者の方々が語ってくれた事が二度とおこらないように、なにかできることがないか考えていきたいです。

「広島に行って」

中川　良幸（４０歳代　男性）

この度、思いもよらないきっかけで、小金井市主催の「平和行事参加の旅」に参加することになりました。平和記念式典はテレビ等で見たことはありましたが、その場に参加出来るというのは大変貴重な体験だと思いました。

昭和２０年８月６日午前８時１５分。

人類史上最初の原子爆弾が、広島に投下され、その年の１２月末までに約１４万人が亡くなったと言われています。情報としては知っておりましたが、７０年以上前の話です、どこか遠い国の話とも思っていました。

しかし、初めて平和記念資料館に入って被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や絵などを見たとき、急にリアリティを感じました。ああ、ここにある服を着ていた人は亡くなったのかと。階段に焼き付いた人の影を見たとき、この人は何を思い、何を見ていたのか。怖かったのではないのか、死ぬことに悔しかったんではないだろうかと。

また、資料館の中には被爆者証言ビデオが見れるコーナーがあり、多くの人の当時の生々しい証言を聞くことができました。当時、生き残った者達が、どのように地獄のようになった広島で生き残り、救助活動をしたか、何が出来たのか。話に引き込まれ、時間が経つのも忘れていました。印象的だったのが、皆して、「戦争は悲惨だ、決して戦争をしちゃいけない」と語っていることです。体験者だから語れるリアリティ、戦争を知らない私にとっても重い言葉です。

原爆ドームを目の前にした時、セミの声を聴きながら「あの時もこんな感じだったのかな」と思い、ふと急に背筋が冷え、思わず空を見上げてしまいました。綺麗な空でしたが、当時は真っ黒になったそうです。

戦争は悲惨です、何もかもを破壊し、全てを奪います。家族も、友人も、思い出も、故郷も。軍人も市民も関係なく。戦争を知らない我々は、戦争という化け物を理解せず、解決手段の一つとして軽々しく選択肢の一つに挙げようとします。しかし、犠牲になるのは殆ど市民です。

平和な世界の実現に、自分には何が出来るか、何を思うか、すごく考えさせられた旅でした。

「平和行事参加の旅」

池上　裕（１０歳代　男性）

１９４５年に祖父が広島市の学校に通っていたことを、私は中学二年生のときに母から聞きました。勤労奉仕で投下の前日までそこに居ましたが、たまたまその日は実家に帰省していて助かったようです。それを知り、身近なところにそんな人が居たんだと驚きました。なので平和行事参加の旅に誘われた時も行ってみるのもいいかなと思いました。

実際に原爆にまつわる色々な場所に行ってみると想像していたより多くのことを考えさせられました。平和記念資料館で見た絵は、写真で表せない描いた人の感情がこめられているようで、印象に残っています。辛い、悲しい、だけでは表せないような複雑なものを作者は伝えたかったんだろうと思いました。

式典や資料館で見たり聞いたりしたことはほとんど知識としては頭に入っていたことでした。ですが、知っているだけでは分からない広島で何が起きたかということを感じることができたと思います。しかし同時に、完全に原爆の恐ろしさを理解することもできないかもしれないと思いました。原爆の被害者と同じ物や風景を見ても、その人が感じた「痛み」や「絶望」を理解することは、平和な社会で生きている自分には到底できるものではないと感じました。でもだからこそ、少しでもそれを伝えるために努力していかなくてはいけないと分かりました。これから生きていくなかで平和の尊さや大切さを忘れずにいようと思います。

「平和作文集」
「平和行事参加の旅参加者による感想文」

発　行　令和２年３月８日
　　小金井市

編　集　小金井市企画財政部広報秘書課広聴係
　　小金井市本町六丁目６番３号
　　☎０４２－３８７－９８１８

再生紙を使用しています。